
君のいた日々

* SHUL *

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

君のいた日々

【Nコード】

N5028E

【作者名】

SHUL

【あらすじ】

『中川京介の“妹”になれ！』死んだとされた市原小春は神様と名乗るおじいさんに小さい頃から好きだった京介の“妹”にされてしまった。『好き』と伝えられるわけでもなく、ただ現世の人間に自分が“妹”として生きているということがバレたら、あたしの存在自体をすべて消されてしまう！？『あたしだよ？小春だよ？』分かってもらいたいのに。『好きなんだ。京介のこと』伝えたいのに。消えることに怯え続け、それでも京介の心の中を知りたいと思う小春。小春の全存在をかけた脱・恋愛ストーリー。

TAKE 1：神様

「ここは、天国への待合室じゃ」
そんな言葉、信じない。

「お前は転生する準備をする」

あたしはあたしだ。もとの“小春”に戻してよ。

広く白い世界で、あたしはおじいさんと向き合っていた。

天国?? 何であたしがここにいるのよ?

夢でも見てるのかな?

頬を思いつきりつねってみる。

ほら、痛くない。

「死んでいるんじゃないから当たり前じゃ」
あたしはムツとした。

「っ・・・」

あたしはおじいさんに背中を向けて走り出した。

息も上がらない。汗も出ない。・・・おかしい。

何メートル、何キロ走ったと感じても、元のおじいさんの場所に帰ってきてしまう。

夢だ・・・悪い夢を見る。

死んだ・・・??

あたしは死んだの・・・??

今でも、覚えてる。

あたしの前で光ったライト。

突き飛ばされて空を仰いだ。

頭をひどく打ったと思ったけど・・・。
死んだ？

「あ、あたし・・・死んでるの??」

ひさまずいて聞く。

「ここは天国じゃ。死人が来るところ」

やっていないことがたくさんある。

勉強、親孝行、友達とお喋り・・・、告白。

まだこれからと思っていたのに、すべて、失った。

「未練があるみたいじゃな」

あたしはうなずく。

「でも、どの道転生するしかあるまい」

おじいさんの言葉はあたしにとっての『心の矢』だ。

「市原 小春。 16歳。 1992年2月25日生まれA型」

何であたしの個人情報知ってるの!?

おじいさんはあたしの表情を見て何を言いたいのか言い当てた。

「お前の守護霊の情報じゃよ」
しゅ……これい??

「お前の右肩辺りにいつもおる。日常生活を見張っててくれてその情報を天国に持ってきてくれるんじゃない」
あたしは右肩を見たが何もいない。試しに手ではらってみるが何も無い。

「当たり前じゃ。わしにしか見えん」

「……あなた、何者ですか?」

「……わしか? わしは『神様』じゃ」
かかか、神様!?

神様ってホントにいたの?!

「……だからわしじゃて」
人の心読まんといってください。
ちよぴり感動しているあたしに神様は言った。

「中川 京介か……」
あたしの肩はビクツと動いた。

「お前、こやつに告白というものをしたかったそうじゃな」
は……はい……。
そこまで個人情報がもれているとは……。

「未練はあるのか？」

は・・・はい・・・。

「よし・・・じゃあお前には特別に奥の手を使ってやろうかの・・・」

神様B5サイズの資料を何度も見た。

「お前、中川 京介の“妹”になれ!!」

は・・・はい・・・はい!!?

「7日間お前を中川 京介の“妹”として地上におろしてやろう。
今の状態じゃ霊体じゃから普通のやつには見えんが・・・“妹”になれば普通人とも会話ができる」

「いつ・・・妹って、何で京介の“妹”なんですか!？」

「や、ほかのやつがいいんじゃないやったら変更してもいいんじゃないけど」

「やつ、やだ!!」

え、え・・・??京介の“妹”!?

まじやったあ!!

やつば告白しなきゃだよね!?

死んでからこんなこと絶対できないよ。

「ダメじゃ」

へ?

「死んだ人間がまた体をもらって自分の存在をアピールできる。そ

んなつまい話ないじゃろう」

「え、でも体もらえるし・・・」

「これはあくまで奥の手じゃ。お前が“妹”のまま中川 京介に告白をして市原小春とばれてみる。そのしゅんかんお前は体ごと消えてここに戻ってくる。そして『無』の門を通らされてこの世にお前がいたという存在はすべて消されてしまうぞ」
あたしの存在が、消える？

「7日間を無事に過ごしたらお前は無事に天国に昇っていける。でも、この奥の手を使用した死者は何人もおるが、無事に天国に昇っていった死者は指で数え切れるほどじゃ」

怖い・・・消えるのが怖い。

でも、京介に会いたい。

会いたい――。

「どうするか？」

「・・・神様、あたし・・・」

無事は0でも京介に会いたい。

「京介の“妹”になりたい!!」

TAKE 2：妹

『京介の“妹”になりたい!!』

そう言った瞬間あたしの目の前は真っ黒に染まった。

“またあの手を使うんですか・・・”

“この子は大丈夫だろうか・・・”

“中川 京介には先着が・・・”

頭の中でいろいろな声が聞こえた。

体が一気に落下するような感じがした。

チュンチュンチュンチュン・・・。

「・・・・・・・・」

小鳥の声がしたので目が覚めた。

日差しがまぶしい。

ここはどこだ？

あたしは誰？

バッ

あたしはその場から跳ね起きた。

「えつと・・・」

寝ていたのはどこかの公園のベンチの上だった。

ここは、覚えてる。

よく来てた公園だ。

てか、今までのまさか夢だった??

あたしはベンチから降りようとした。
が、足がなかなかつかない。

「あれ？」

自分の足元を見ると23cmくらいあるあたしのあしが縮んでいる。
長さが無い。あ、あたし、こんな短足だったわけ!?

手のひらを見た。

石ころを2・3個持てる程度しかない。

もしかと思い公園のトイレを探した。

走っている間に分かった。

周りのものが大きくなっている。

今にもあたしに襲い掛かって来そうだ。

「ッ!!」

トイレの鏡を見た。

そこには、あたしじゃなくて3歳ぐらいの子供が映っていた。

「あああああああたし・・・・・・・・!??」

テンパるなあたし!!

と、とにかく家に帰ろう!!

あたしは公園のトイレを出て公園自体から出ようとした。
あと一歩で公園を出ようとしたその時、

「おい、莓！待ってろって言っただろ！！まあ、1時間も待たせて
たらなあ・・・」

あたしの思考は停止した。

ずっと長い間のように感じた。

10年ぶりの再会のように感じた。

「京介え！！」

京介だった。

あたしは京介に向かって駆け出した。

あれ？あたし足遅くない？？

ポカッ

やっと追いついたと思ったら京介に軽くげんこつされた。

「コラッ！“京介”じゃなくて“お兄ちゃん”だろ？」

え、は？？京介何言っちゃってんの？？

や、あたしあなたの妹になった覚えは・・・

『お前、中川 京介の“妹”になれ！！』

あつた・・・。

え、まじ？

まさか、さっき鏡に映ってた3歳児が・・・あたし？？

夢じゃなかったの——！！？

「莓、何やってんの？家に帰るよ」

京介は平然として“あたし”を呼ぶ。

あたし“莓”って名前なの？？

ばたばたとしてやつと京介に追いついて、隣を歩く。

あ、あたし・・・ホントに京介の“妹”になっちゃったんだ・・・。
これから京介のいろいろな姿が・・・っと、変態みたいな言いかた
はよそう。

でも、これからあたしどうすればいいんだろう？

たかが一緒にいたぐらいじゃなあ・・・。

『ばれたら消える』

そんなへマ絶対しない！！

生まれ変わって京介のところ戻って来たいもん。

「・・・・・・・・」

あたしは独り言を言っていたようで足が完全に止まっていた。
10メートル先くらいで京介が腕をくんで待っていた。

あたしはパタパタ走る。

今日はよく走るなあ・・・。

「たつく、お前は歩くの遅いなあ！！」

体が軽くなったと思った瞬間に、地面が遠くなった。

「！！」

京介はあたしを軽々と持ち上げていた。

「早く帰るぞ・・・」

全然怒っていない京介の笑顔。・・・やばい、泣けてきた。

ふと、頭の中にあの神様の声が聞こえた。

“ お前の体は生きておる ”

「 え？ 」

“ お前はまだ死んではいなかった。つまり仮死状態のようじゃ。死者の名簿にはまだお前の名前はなかった。つまり魂が抜けて体はまだ生きているということじゃった ”

つまり・・・あたしは・・・

“ 体には戻る可能性があるんじゃないよ ”

いつ・・・今すぐ・・・今すぐあたしに戻して！！

“ 無理じゃ。1度この奥の手を使ったら期限まで取り消しができん。しかも、7日後までお前の体が生きていたらの話じゃが・・・ ”

何それ！？でも、7日もたせれば大丈夫なんですよ？

“ お前は交通事故で重態を負っている。5日もせんうちに体は死んでしまう ”

体が死んだら、生き返ることはできないの？

“もちろん。おまえ自身の体がないんじゃないから”

選択の余地がなくなった。

気持ちを伝えぬまま天国に昇ったら、あたしには来世まで傷が残る。でも、気持ちを伝えてしまったら、あたしは無くなってしまう。

あたし、どうしたらいいんだろう。

もう、体には戻れないんだよね？

「莓？着いたぞ。降りろよ」

ハッとして見ると京介の家の前に着いていた。

そういえばあの公園京介の家から結構近かったっけ……。

初めて来た京介の家。

京介らしい香りがする。

あたし、生きてるんだよね？

でも、死んでもいるんだよね？仮死だけど。

玄関に入るとすぐ左の廊下に階段があった。

そこからは若い女の人降りてきた。

「おう、姉ちゃん。莓連れてきたぞ」

「莓……ちょっとこっち来なさい」

え……？

あたしは言われるがまま京介が呼ぶ“お姉さん”に着いて行った。

巨大化したように見える京介の家の階段。

足が短足になったのであたしは手を使って時間をかけてのぼっていた。

それをじつとり眺めてくる“お姉さん”

抱っこぐらいしてよ！！

やっとの思い出13段の階段を上った時にはあたしの息はあがって

いた。

「こっち来て」

フラフラする足をなんとかコントロールしながらもあたしは着いて行った。

部屋に入ってみるとそこはフローリングの“お姉さん”らしき部屋だった。

天井も壁もピンクのレースだらけで目がチカチカした。

家具にもピンクがないものがない。

そういえば、この“お姉さん”が着ている服も・・・。

あたしは近くにあったピンクのレースのかたまりにしか見えない座布団に座って無意識に手をあごに当てて考えていた。

「あら、感づくのが早いね」
え？

“お姉さん”もクリアピンクの小さな折りたたみ式のテーブルをはさんであたしをまたじつとりみてピンクの座布団に座っていた。

「あのお・・・どう意味で・・・」

「え、あんたまだ気づいてないの？こんな趣味したあんたの友達知たないの？」

や、友達ってあなた・・・あたし今日“苺”になったばかり・・・

それは“苺”だった時じゃない。あたしが“小春”だった頃。

そうだよ。よく考えたらこんな趣味してるのはあたしの周りではこいつしかいなかった。

「まさかあんた・・・遠藤 杏奈！？」

それはあたしがまだ“小春”だったころの友達の名前。

「よくできました」

細い目をして言う。

口笑ってないぞ……。

「じゃなくて！何で……あなたが京介のお姉さんに……」
あたしが“杏奈”を指差す手は震えている。

「何でって……あんたと一緒に死んだのよ？3日前」
3日！？死んでからそんなに経ってるの！？

「あたしは3日前から奥の手で地上に降りさせてもらった。京介の“姉”としてね」
ニツコリと口を上げて笑う。

「な、何で京介の姉に！？」

「あら、知らなかった。あたし、京介くんのこと好きだったもの」
何——！！？

「フフ、もちろん小春が京介くんのこと好きだって知ってたよ？でもあたしも好きなんだから仕方ないよねえ」
うそー……。

「まあ、せいぜいあたしと京介くんの大人の関係を見ときなさいよ。妹じゃあ恋愛対象になんてならないしね」
口に手を当てて笑いをこらえている。

“中川 京介には先着が……”
地上に降りるときに聞こえたあの声はそういうことだったのか。
杏奈の性格からして絶対京介とラブるつもりだ！！

見てなさいよ杏奈。

あんたの思い通りにはさせない。

あたしが絶対許さない！！

TAKE3：宿敵

「杏奈・・・あなたって奴は・・・」

あの時間こえた“先着”って、杏奈のことだったんだ！！

「ちよつと、気安く『杏奈』なんて呼ばないで。友紀菜お姉さまと呼んで」

友紀菜・・・お姉さま??

あたしは思わず噴出した。

生きていた頃はあたしより顔は大人びてたくせに背はあたしよりも低かった。

たしか・・・150いくかないくらい??

バカにしてたら怒られたけど・・・まさつか、『お姉さま』とはね！！

やばい、腹痛い・・・。

「いつまで笑ってるのよ」

「いつて!!」

杏っ・・・友紀菜お姉さまが口は笑っているけど目が笑っていないという器用な顔つきであたしの耳をつまんだ。しかも力いっぱい。あたしもさすが・・・3歳児のような体じゃこの力耐えられません・・・。

「いつて!! いたたたた!! やめてって!! おらっ、杏奈っ!!」

<しばらくお待ちください>

「あんたは今あたしをバカにはできないのよ」

は？

「あんだ、その体、見た目何歳くらいだと思うっ？？」
へ？

あたしは自分の足のひらを見た。

小さい・・・。

次に自分の足。

短い・・・。

次に顔。

小さい割りにでかい！！

「・・・第一印象3歳くらい」

「ブツ！！」

ブツ？

「ハハハハハハハハハハハハ！！！！」

次の瞬間部屋中に杏奈の笑い声が鼓膜を突き破るように響いた。

「うつせ——！！」

あたしは叫ぶが笑い声で消されてしまう。

こいつ・・・。

バンツ！！

「！！！！」

「姉ちゃんうつせえよ！！俺の部屋まで聞こえてくんだよ！」

京介が来た瞬間に杏奈の笑い声はピタツと止まった。

「あーら、京介。ごめんねえ。ちよっともお母がおもしろくって」

見ている側は反吐が出そうな程のおそろしいぶりっこ。
こいつ・・・

「あれ？ 莓まだここにいたんだな。 2人して笑ってたのか？ 楽しそうだな」

京介の笑顔に反吐はぜーんぜん出ませーん」

「2人とも仲良かったんだな」

「いや、それ程でもお」

しまった。 杏奈と言葉がハモツてしまった。

杏奈もチラリと横目であたしを見た。

多分同じこと思ってるだろ・・・。

杏奈があたしに近寄ってきてすぐ隣に座ってあたしの肩を寄せた。

「いっつ・・・！！」

尻に激痛の痛みを感じた。

おそろおそろ自分の尻を見ると洗濯バサミ以上に杏奈の指があたしの尻にくいこんでいた。

ハハハ・・・負けてたまるか！！

ブニツ！！

「ぬっ・・・！！」

あたしは小さい手で杏奈の尻をつかんだ。

こいつ・・・尻固え！！？

「じゃ、2人仲良くするんだぞ」

京介は笑顔でドアを閉めた。

「は——い」

ちっ、またかぶったよ。

やっとこそ杏奈の手があたしの尻から離れた。
でも痛えなあ……。

「さ、さっきの話の続きだけど」

え、戻しちゃうの!? またあんた笑うんじゃない?!

「何だって?!」

やべっ。何で聞こえてんの!?

「プ、あんたは相当チビよ。だってその体、実は5歳児なのよ」
5・・・才児。

「まあ、所詮3歳だろうと5歳だろうとあんたは今は京介の恋愛対象じゃないわ。むしろ、例外よ!」

「!?!」

ちよつと、そんな言い方・・・っ!!

「その分あたしは18歳。年上って手もアリでしょ?」
杏奈はスタイルのよい体であたしを見下した。

「フフッ、せいぜい見てなさいよ。あたし死んでも全然あきらめきれないんだからここにいるのよ」

「杏奈・・・何だよ。友達でしょ?」

あたしが発言した瞬間に杏奈の目つきは変わった。

「友達・・・だった・・・でしょ? どうせ生きていた頃の話じゃない。今は違う。諦めずにここにきて、京介とイチャツて、生きてい

た頃はあんたに京介を独占されっぱなしだったもの！」
あたしが・・・独占してた？

中学校3年生の時、あたしは転校してきた。

前の学校ではいじめられていて心配だったけど、すぐに友達ができ
た。

『俺、中原 京介。よろしく！あ、学級委員なんだ！何でも聞いて
？』

隣の席だったのが京介だった。

『ちよつと！京介ばかり独占しないでよ！あ、あたし市原 小春
！あたしも学級委員なんだあ！よろしくね』

京介とは反対側の隣の席に座っていたのが小春だった。

2人ともいい人だな。良かった、やってけそう・・・。

この時は安心していた。

2人は小さい頃からの幼馴染なので仲も良く、よく一緒にいた。

あたしも2人の輪に入れた。

でも、しばらく月が経つと、

『ごめん、委員会の仕事あるんだ！』

『俺も・・・』

2人が2人である時が多くなってきた。

そんな中、こんな声が聞こえてきた。

『あの2人、超仲いいよね！？』

『付き合ってたんじゃない？』

耳障りだった。

『杏奈っ、テスト勉強しようよ！京介も一緒なんだけど』

あたしじゃ、あの2人の輪には入れない。

京介くんには傍にいる小春がいる。

何で嫉妬するんだろう。

きつと、好きなんだね。

伝えようとしてもものんきに笑っている小春が京介の付属品だった。

2人はいつも一緒……。

あたしじゃ、小春の代わりになれないの？

あたしが、京介くんを独りいじめできないの？

昔の思い出があるからって、ずるい……。

「……そう、思ってたの？」

あたしは啞然とした。

杏奈は無言のまま立ち上がって、フラフラと部屋の扉を開けて出て行った。

「ちよつとっ……杏奈!!」

あたしも立ち上がって追いかけた。

「ブッ!!」

部屋をいきおいよく出たとき、急に立ち止まっていた杏奈にぶつかった。

「杏奈ー!!お風呂入んなさい!」

『お母さん』という存在の声がこちらに聞こえてきた。

「はい、でも京介と一緒に入るー!!なんちゃって」

通じそうもない冗談を笑顔で言っているとあたしを見下すような笑みであたしを見下した。

「その体じゃ、京介は奪えないわね」

「ちよつ……でも、ばれたら消えちゃうんでしょ?!」

「そーだよ。でもあたし、誰かさんみたいな根性なしじゃないから」

そう言つて階段にゆつくり足をかけた。

あたしは、何もしなくて京介と仲が良かったわけじゃない。
杏奈だつて、生きていた頃何かした？

あたしだけが、そういう『根性なし』じゃない！！

「杏奈に京介は渡さない。体が小さくたってあたしは小春だもん！
！今こうしてまた生きてるもん！！」
杏奈の動きは止まったが、背を向けたまま無言で階段を下りていった。

あたしはそのまま床にペタンと手をついて動かなかった。

「杏奈・・・」

あたしもしばらくして階段を下りた。

京介の家は何度か行ったことあるから家の間取りくらい覚えてる。
リビングはたしか・・・

「あ、莓」

重いドアを開けたら京介が座椅子に座つてテレビを見ていた。

「莓。お前姉ちゃんと風呂入ってくれば??」

首だけをこちらに90度向けて問いかけた。

今、杏奈と一緒に入りたくない・・・。

京介といたいよ・・・。

「やだ。お兄ちゃんと一緒にいる」

あたしは京介の隣に座った。

「おいおいまさかお前俺と一緒に入るつもりじゃねえーだろーな？」
苦笑いであたしを見て京介は聞く。

「！！」

あたしの頭は沸騰して頬を触ってみるとすごく熱かった。

「あはははは、そんなわけないじゃんー。でも良かったり・・・って！！」

後方から醤油のビンが飛んできた。

おそろおそろ振り返ると杏奈が目を光らせてこちらを見ていた。

背筋がぞくつとなるはずだ。この世の者の目つきじゃない。まあ実際そうか・・・。

“はーなーれーろー”

目だけで言ってることが分かるなんて怖い・・・。

あたしは恐がって笑いながらも京介のそばを離れた。

近くにある赤いソファーに座った。

京介ばかりを見ているとテレビの音が雑音に聞こえる。

あたし、何でここにいるんだろう？
？

京介にも告白はできない。

自分がバレて消えてしまう。

一体、何をすればいいの？

だって、このまま穏便に7日間をやり過ごせばあたしはまた生き返る。

記憶を全部消して。

死んだこと、京介のこと、杏奈のこと・・・。

“死ななければ良かった”

今更何の後悔なんだろう。

事故の記憶さえ覚えていなくせに。

ただ1つ、フラッシュのライトが光ったことだけ覚えている。
あれは交通事故だった？

何で自分が死んだかも覚えていないなんて……。
みじめだ。

……そうだ!!

京介に聞けば何か分かるのかも!!

「兄ちゃん!!」

あたしは顔を輝かせて京介を呼んだ。

「？」

はてなマークを浮かべながら京介は首だけ振り向いた。

「あああ、あのね!ここ……こは……こ……」

あ、あたし何言ってるんだ？

「こ……んばん散歩でもどう？」

冷や汗をたらしながら京介に言った。

死ね——あたし!!

「お、おま……ガキらしい言い方じゃねえな。お前」
さすがに京介も苦笑い。

「別、いいよ」

やったあ!!

あたしは心の中でリンボードダンス(?!)を踊った。

ハッと気づいてあたしは構えた。

杏奈はもう風呂に入っていたらしく姿は無かった。

安心したあたしはそのまま京介と一緒にテレビを見た。

杏奈が風呂から上がった後あたしも1人でお風呂に入った。

ただでさえ力のない体なのに杏奈に立ち向かっていく気はない……。

夕飯は京介と杏奈、京介のお母さん、お父さんとみんなで食べた。

こんなこと、死んでからじゃできなかったね。

久しぶりにも感じた家族の食事。

内心あたしは心踊っていた。

「母……。そろそろ行くぞー」

京介が玄関で呼んでいたのであたしは急いだ。

杏奈は自分の部屋で気づいていないらしい。

あたしはせかすように京介の背中を押して家を出た。

TAKE 4：真夜中の空の下

春の夜風はとても気持ちが良かった。

あたし・・・生きていたら普通の高校生だったのに・・・。

京介と同じ高校入るために死ぬ気で勉強してたのに・・・。

死ぬなんてさ・・・。

星が輝いている。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

だあ――！！

これはあたしが死んだわけ聞くのちょうどいいでしょ！？

って京介どこだ！？

「兄ちゃん！！」

ここはあたしが母として地上に初めて降りて来た時の公園。
京介はライトがまぶしく当たっているベンチに座っていた。

「兄ちゃんあのね、聞きたいことがあるんだ！」

京介の顔は無言の笑みに変わった。

『なあに？』って問いかけてきたみたいに。

「・・・・・・・・・・」

ん？

は・・・鼻がむずむずする・・・。

「へ・・・ヘックション！！」

どこにでも響きそうなかいくしゃみが出た。

「つく、春だからってそんな薄着してるからだろ!!」

そう言って京介は自分が着ていた紺のパーカーをあたしの肩にかけてくれた。

ぐつと拳を右手でつくり、気を引き締めた。

「あのさ、小春ちゃんのことなんだけど――・・・」

京介の顔がまともに見れなかった。

曇るというよりか、目がものすごい見開いてしまつて笑みも消えた。完全に、心の傷として残つてしまった・・・?

「あ・・・ああ・・・小春の事が・・・なんでお前が?」

「だって・・・」

「関係ないだろ?」

京介は顔をそらした。

「でも・・・、小春ちゃんのこと、どう思ってた?」

あたしは言い切つた瞬間に固く目を閉じた。

「別に、何とも」

京介は立ち上がり、あたしに大きな背中を見せたまま言った。

「帰るぞ・・・莓」

「っ・・・」

返事なんてできなかった。

だつて・・・あたしは・・・小春だよ？

あたしがここにいるのに、真実は何も分からない。

今京介の言葉が真実だとしたら・・・あたし、ばらして消えちゃいたい。

急に足取りが重くなった。

京介の背中を見つめながら、あたしの『家』となるところへ帰った。

苺の小さなキーホルダーがかかっている扉を見つけた。

あたしの部屋かな・・・。

開けてみるとそうだった。

幼稚園のカバン、帽子、他にも小さなものがたくさんあった。

小さなベッドに座ると肩から紺色のパーカーが落ちた。

「あ、これ京介の・・・」

あたしは部屋を出て京介の部屋に入った。

部屋の中は薄暗くて京介はもう寝付いていた。

あたしは京介のパーカーをハンガーにかけた。

足元に学ランが落ちていた。

「たつく、そのままほつといて・・・シワになるじゃん」

あたしはひとつため息をついて学ランもハンガーにかけた。

その時、生徒手帳のようなものが落ちた。

「あーもお・・・」

あたしはピタリと止まった。

手帳をつかむと京介の部屋を飛び出した。

「これって・・・」

あたしが小春だった時の写真が手帳に入っていた。

確か中学校の入学式の時の写真。

あたしがノリノリでピースしてたのに京介はちつとも乗り気じゃなかった。

中学生という大人の第一歩であたしたちはお互い意識し始めあたしと京介の間が空いていた。

これ・・・まだ持ってたんだ。

恥ずかしいと言って自分見せなかったじゃん・・・。

「・・・バカ」

あたしは京介の部屋の扉に身を任せてずるずると床にへたりこんだ。こんな写真、何にもないわけじゃないよね？

友達のハードルくらい越えてるよね？

寝息の聞こえる京介の部屋に再び入ると手帳を学ランの中に戻した。安心すると一気に眠気が押し乗ってきた。

京介のベッドに横たわってみたら気持ち良かった。

そのまま、京介の横で、夜を過ごした。

TAKE5：おかしな共通点（2日目）

「――」

んー……。

「――」

……お母さん？

「――ちゅ」

あと5分……。

「っ……。 母！！」

バツ！！

「はいい！！？」

気がついたらここはどこ？

あたしは誰？

目の前にいるのは……。

京介！！

自分の手を見る。

……。 小さ。

やっぱ……。 夢じゃなかった……。

「何でお前が俺の布団にいつの間に寝てるんだよー」

「・・・・・・・・・・」
眠い・・・・。

「まだねぼけんのかっ！」

「いてっ！」

頭を一発こづられた。

あたしはしぶしぶ布団から出て京介の部屋を出た。

「あら、ここはあなたの部屋かしら？」

「っ・・・・・・・・」

あたしは血の気が引いた。

目の前の杏奈はまばゆい笑顔で仁王立ち。

こめかみにはうっすら血管が浮き出していた。
ダッ！！

「あ、ちよっ・・・！」
バタンッ！！

「こは・・・・・・・・じゃない、苺！！」
へ・・・・・・・・部屋近くて良かった。

あのままいたら殺されてたよう・・・・。

クローゼットを開けるとカラフルに並んだ小さな洋服がずらりと並んでいた。

青のストライプのワンピースをつかむとすぐに着替えた。
ガチャ

「苺ー、着替えたか？つと、着替えチュー・・・・」

「っ……！！ノック無しに入ってこないでえ！！」

「えっ……」

ボタンッ！！

あたしはすぐにドアを体で閉めた。

着替え終わるとドアを開けて廊下に出た。

そこには京介が立っていた。

「あ……」

「つく、幼稚園児がそんなデリカシー持つなよな。ほら、買い物行くぞ！！」

買い物！！

買い物なんて久々に感じる。

服買ったりコスメ買ったり……。

やった——！！

手を上げて喜んでいたら京介に体を抱えられて車に投げ込まれた。来たのは市でも大きいほうのショッピングセンター。『ジュスコ』杏奈は幸い美容室に行ったようだからあたしと京介と京介のお母さんの買い物になりそうだ。

「じゃあお母さん食材買つて来るねー」

京介のお母さんは買い物かごを持って食品売り場に向かった。

「……あれ？お前行かなくていいの？」

「……え？」

「１００円分の菓子選んでくりゃいいのに」

「……！！あたしだって行きたい店あるもん！！」

「えっ……」

あたしは京介の腕を引っ張った。

それはあたしが“小春”として生きていた頃に行きたかった店。

大人向けのかわいい洋服屋さんでかわいい小物もあり1度も買い物をしたことがなかった。

でも、いざついて中に入ろうとすると、

「あほ、お前が来る所じゃねえ」

と、頭に1発。

中に入らないあたしたちに気づいたのか、店員さんが駆け寄ってきてくれた。

「彼女さんにプレゼントお探しですか？？」

10分ぐらいその店員さんに薦められた。

ネックレス、リング、ブレスレット……。

全部ペアだったけど。

『喜びますよ』

『お勧めです』

『かわいいですね』

の言葉を連発していた。

それを聞くたびにあたしは思った。

あたしが隣に“彼女”としていても、誰もそうとは見てくれないのかな？

あたしが仮に京介に気持ち伝えたらどうする？

消えるだけ。・・・損だよ。

誰も、あたしを京介の“恋人”としては見てはくれないんだ。

あたしは下を向いていた。

京介は何かを掴むとレジに持って行き、清算を済ませて戻ってきた。

「・・・兄ちゃん??」

店の外へ出ると京介はさっきの店で買った物の袋を破り、小さなものを取り出した。

「ほらっ」

首に冷たいものが触れた。

苺のネックレスだった。

「指輪とブレスレットはお前みたいなサイズなかったからさ、それがちょうどお前にいいと思って」

“優しいお兄ちゃん”の姿はとてもまばゆかった。

「ありがと・・・きよ、じゃない・・・兄ちゃん!!」

あたしは思わず京介に抱きついた。

「お前こんな“ちゃっちい”のが好きなのか? ホント、お前等似てるよな」

小声でつぶやいた京介の独り言は聞き取れなかった。

「お前等?? 誰!??」

「いーの! 気になるな!」

京介は軽く流した。

母のネックレスを見ると、たちまち笑顔がわいてきた。
食品売り場に行つて京介のお母さんを見つけた。
かごに入つてゐる食材からして今日はハンバーグ？？

「母！菓子コーナー行くぞ！！」

「うん！」

さすが、三歳児のような体は食品棚もでかく見せる。
あたしは生きていた頃好きだった商品を探した。
生きていた頃には届いたけれど、今は届かない高い段にあたしの目
当ての商品はあつた。

「くそ・・・あたしだったら・・・」

ジャンプして見せたけれどもすんごい空回りした。

「バカかお前は・・・」

京介がひよいと取つてくれた。
頼めばよかったんだ・・・。

「ええ？？『イチゴミルクキャンディー』??甘つたるぞー・・・」

「いいじゃんべつにー！！」

「てかこれ・・・はは・・・まさか」

え？どうしたの？

「お前、小春と味覚も一緒かよ」

も・・・じゃあさっきの似てるよなつても、小春のこと???

「しゃーない、コレ買つか」

あたしのこと、やっぱり覚えててくれたの？
さっきのネックレスのよりか笑顔が出てきた。
うれしいっ・・・。

ただ、それだけが溢れ出る——・・・。

TAKE 6：体の鼓動

「正直に答えなさい、小春——」

フリルがいつぱいの杏奈の部屋であたしは正座をして青覚めていた。

「その首にかかっている苺のネックレスは何かしら？」

笑顔だけれど怖い。それが杏奈の怒りの象徴。

「これはゝあの・・・京介が」

「あらゝそう」

「アハハゝそう」

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

「渡しなさい！！」

突然杏奈が飛び掛ってきた。

「やだあ——！！」

あたしは急いで杏奈の部屋を逃げ出してリビングに来た。

「苺、お前は忙しいなあ・・・」

京介・・・お前のせいぢや。

そこに、1つの電話が鳴った。

最初を取ったのは京介のお母さんだった。

「・・・・・・・・はい。そうですか」
それだけいうと切った。

「小春ちゃんのお母さんからよ」
その途端京介は飛び上がった。

「何て！？何て言ってた！？小春意識——・・・・・・・・！」

「まだ、戻っていないそうよ」
京介のお母さんは呟くように言った。
そして京介の肩が下がった。

「心配しなさんなつて。小春ちゃん元気に戻るわよ」
京介のお母さん・・・・・・・・まぢありがとう。
でも京介の表情は戻らなかった。

「何で・・・・・・・・杏奈の話は出てこないんだろ・・・・・・・・」

「そりゃーあたしはもう死んだからよ」
げっ、杏奈。

「しばくわよ」
そっちこそ人の心読まんといってくださいーい。この・・・・・・・・おつと危ない危ない。

「京介はあたしが死んでから小春の心配ばかりしてる」
寂しそうに京介を見つめながら呟いた。

「あたしだって体が生きていたら京介は心配してくれた。何か・・・・・・・・死んだ人間はもうさよならって感じ・・・・・・・・」

それだけ言つと部屋に戻つて行つた・・・と、思ったが。

「ネックレス渡せえー!!」

「ぎゃ——!!」

京介は部屋にこもつたまましばらく出てこなかった。
あたしは決心して京介の部屋に静かに入つた。

「何か用？」

ムスツとしたのが丸分かりの京介の声。
ちよつと足がすくんでしまった。

「あのさつ・・・小春ちゃんさ・・・」

手まぜを激しく繰り返しながらゆっくりと喋つた。

「何だよ・・・もう何もいらねえよ・・・」
は？

「お願いだから・・・」

京介・・・どうしたの??

「何にもいらねえから小春を生きさせろよお!!——・・・」
この時、あたしは何を思つただろう・・・。

「兄ちゃんしつかりしてよ!!」

京介の体がビクツと反応した。

「だって・・・あたしさ、小春ちゃんのこと何も知らないけど・・・
これだけは言えるよ!!」

京介はぼーぜんとしてあたしを見ている。

「小春ちゃん喜んでるよ。だって京介兄ちゃん生きてるんだもん！絶対思ってる・・・」

最後を言うほど声が弱々しくなり言いにくくなった。

「そうかもな・・・」
え？

「だあってさあ！お前小春の分身みてえなもんじゃん！お前がそう言ってるなら、小春もきつと——・・・」

それ以上は言ってくれなかった。

小春は思ってるから。

信じてね。

“あたし”は、ここにいますから。

TAKE7：禁断の決心（3日目）

小春・・・小春殿・・・。

あたしの前には神様がいた。

お前の・・・体・・・危ない・・・。

聞き取りずらいけれど大部分はよく聞こえる。

お前の体・・・危ない。

バツ！！

あたしは汗だくで布団から飛び起きた。

「・・・・・・・・夢か」

悪い夢？それとも現実になる予知？

あたしは頭を抱え込みながらベッドから出た。

「おっはよー！！苺！！」

一瞬頭の中真っ白になりました。

「おはよ」苺

「お、はよう・・・ごじやります」

これは杏奈か！？正真正銘の笑顔が咲いてる！？

「あ、んな・・・どうしたの？」

「ん？だつて、あたし・・・明日最終日だし」
「は・・・はあ・・・」

「じゃあまた生まれ変わったら会えるのかなあ。なんて」

「会えないわよ」

えっ！？そこまでハッキリ言わなくてもっ！！

「だつて、あたし、消えるもん」
「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「は？」

「だ〜か〜ら〜。あたし、杏奈さまってことばらすの」

あたしの頭の中、しばらくお待ちください。

本当の焦りが感じられた。

手の握りこぶしに汗が溜まるのが分かる。

「ちょっと待つて〜正体ばらすつてえ〜・・・消えるんだよ！？何
言つてんの！！」

杏奈はそんな様子もなく陽気に窓を開けている。

「何つて・・・ただ京介に『好きです』って言うだけーですけど」

「はあ！？だけー、の問題じゃないのよ！？この世から何もかも無
くなるんだよ？！あんたが生きていた証さえ！！」

「・・・いーよ」

え？

ボタンッ

杏奈は部屋を出て行った。

あたしはその場にへたりこんだ。

何・・・？あたしまだ寝ぼけてるの？？

杏奈・・・消えちゃうよ！！

あたしはバタバタと階段を掛けて降り、キッチンへと向かった。

「待つてよ！！あん・・・」

あたしがドアを開けた途端にみんな目を丸くしてあたしを見た。

あ、朝食タイムですかあ。

「バカ」

杏奈が呟くのが聞こえてカチンとした。

朝食も食べて終わり、杏奈が食器の片づけをしていた。

あたしはそばまできて周りに聞こえないように杏奈に話した。

「ねえ！さっきの話本当なの！？」

「うん」

あつさり答える杏奈に再びカチン。

「そんな簡単な問題じゃないでしょ！！」

「いいじゃない。あたしが決めたことなんだから」

杏奈はそう言うと言と食器洗いを済ませて自分の部屋に戻って行った。

こんのおー！！

でも、昼が過ぎても杏奈は出てこなかった。

思い切って杏奈の部屋に入った。

あたしはそこで立ち止まった。

杏奈は窓の外を座ってみていた。

たぶん、この部屋に入ったときから。

肩が小刻みに震え、鼻をすすする音が聞こえる。
泣いてたの・・・？

「杏奈・・・」

くると杏奈はこちらを振り返った。

杏奈の目は赤く腫れて涙が溢れ出ている。
それに関して何も言えなかった。

「小春・・・あつ、あたし・・・正直、消えるの・・・怖い・・・」
ぎゅと唇をしばって発した言葉。

「告白しても・・・消えたら京介・・・の・・・心の記憶、消えるけど・・・石ころ１つでもいい・・・『あたし』を残してほしい・・・」
涙ぐんだ声は聞くだけで精一杯だった。
無意識にあたしは杏奈に駆け寄った。

「それなら・・・気持ち伝えなくても・・・」

「バカね、あんた・・・分かってない・・・」
え？

杏奈は服の袖で涙をぬぐった。

「そーゆーの、弱虫ってゆーの！！」
・・・杏奈？

「バカ・・・ホントバカ。あんた京介のことどれくらい好き？」
好き・・・そりゃ表せないほど・・・。

「あたしはあふれるほど好き。こんな気持ち生きてるうちに伝えればよかったって後悔してる。だって、あたしにとって人生で１番大きな“恋”だったんだもん！こんなの・・・伝えずに生き返った

「前世の自分を許さない。消えたほうがましなんだ」

あたしの心の奥はズキンと痛かった。

気持ちだけじゃ杏奈に好きな気持ちは負けはないと思ってた。
でも、今じゃ杏奈の方が勝ってる。

「京介にそんなこと伝えちゃったら、ホント・・・全部無くしちゃうよ?」

説得をするつもりが何か弱気になってしまふ。
足が小刻みに震え始めて口元がガクガクする。

「やだよ・・・もう・・・杏奈には・・・」

「ごめん。会えないね」

涙で濡れていた顔には涙以上に綺麗な笑顔が浮かんた。

「っ・・・」

杏奈は立ち上がってドアに手を掛けた。

「やだなあ・・・涙は無しだよー。もうそんな年じゃないんだから。でも・・・」

「え?」

「やっぱり、小春がずるいって言い方・・・違ってたかも。あたしがただ、動かなかっただけだった。だから・・・」

「ごめんね」

申し訳なさそうなしぼれた笑顔。

そんなあっさり言わないでよ・・・仲直りできたと思ったのに。

行かないで――・・・。

「ばいばい、小春――・・・」
ガチャン。

あたしの返事も聞かずに、杏奈はドアを閉めた。
杏奈の部屋に取り残されたあたし。

一体今から何をすればいい？

ただ杏奈が消えるのを待つとくともいう？

このまま会えないっても？

今ここにいる“あたし”を、“小春”として見てくれた杏奈を？

“小春”の人生の中での友達だったのに――！！

あたしは立ち上がって杏奈の行方を追った。

たぶん杏奈は京介のところに行ってる。

でも見当がつかない。

家の中を隅々探したけれど2人の姿は見つからない。

「杏奈っ・・・京介・・・！！」

時間が経つほど必死になる。

どこがある？どこがあ・・・

あたしの頭の中には母として最初に訪れた場所がよぎった。

「あの公園っ・・・！！」

3歳児のような5歳児の体では走りにくいし体力もいる。

いじめられて泣きながら家に帰ってくる5歳児にも見えた。

公園は京介の家のそば。

あたしたちが生きていた頃はよく行ったものだった。

思い出の場所っ・・・杏奈！！

公園の門に入ると、小さい影が2つ見えた。

お互い向き合っている杏奈と京介だった。

とても入れる空気ではないと察した。

2人の会話が耳に届いた。

「姉ちゃん・・・??何か用?」

京介はベンチで背伸びしながら聞いた。

「ちょっと、話したいことあつてね・・・」

「話?」

「うん。遠藤 杏奈って、知ってるでしょ?」

京介の肩がピクツと動いた。

「あ・・・うん」

「ちょっと気になるの・・・その子について、何か話してくれない?」

え?というかのように京介は杏奈を見た。

京介はえらくためらうように口を閉じていた。

「ダメ・・・かな?」

杏奈は眉をハの字にして肩をすぼめる。

「じゃ・・・姉ちゃんには・・・話そうかな」

京介は腕を組んで目をつむった。

「杏奈は転校生だったんだ——・・・」

「遠藤 杏奈です。よろしくお願いします」

転校生なんて興味ないけど、“そいつ”だけはちょっと気になった。

!!

中3にもして何だこの身長！？ちっさ！

この反応はみんな同じだった。

でも、俺みたいなリアクションで済まされないやつは何人もいたんだ。

『やっぱ、あの身長。小学生じゃないの？』

『ここは受験生の来るところです』

俺の周りからはかすかな笑い声に聞こえたものが内心をイライラさせた。

さっきの自己紹介からして“ここ”に怯えている目をしていた。

緊張といったもんじやない、壊れそうなの……。

だから俺が何とか守ってやらなきゃ。って思った。

守るって、なんか好きなやつとも思うけど、俺は違う。

いじめられてるやつ見るのぜってえヤだから。それから逃げようとしてただけ。

俺の隣に座った時はホッとした第一印象よくしなきゃな。

ひとつ俺は咳払いをして話しかけた。

「俺、中原 京介。よろしく！あ、学級委員なんだ！何でも聞いて？」

んっ？これは挨拶といったようなものだろうか？

彼女の笑顔が返されたので安心した。

「ちょっと！京介ばかり独占しないでよ！あ、あたし市原 小春！あたしも学級委員なんだあ！よろしくね」

昔からの幼馴染の小春がはしゃいで彼女に言った。

「ねっねっ！あたしがなったクラスに転校生来たの初めてだよおっ！」

そうだった。だからはしゃいでるのか……。

本人には悪いけど、中学生の小春には似ても似つかない体型がかわ

いらしく思えた。

当然座高も俺のほがずつと高くて本当に座ったまま見下ろす形になっている。

学級委員のことがあって俺と小春は杏奈と仲良くなっていた。

「杏奈、一緒帰ろうぜ！」

あ、小春も一緒だけど。

中学3年生とは思わない異性関係に周りは驚いていた。

「お前、女子2人の中に男子1人ってやらしくないのかよ？？」
クラスでつるむ男子からの言葉も全然気にならなかった。

「小春と遠藤、どっち選ぶんだよ？」

にんまりした笑顔を向けられて聞かれた時もあった。

「俺は、『友達』だぜ？」

かわすようにいつも答えた。

そりゃあ中学3年生にもなれば異性についても気になるもんだ。
でも俺、小春と杏奈がいるだけで今はいい。

この居場所がいいんだ――。

ある日杏奈が1人でいたんだ。

空き地で古ぼけた段ボール箱に入っていた猫の赤ん坊を抱き上げて
あやしていた。

漫画やドラマでよくこんな光景あるな。

俺、ぜってえーそういうのほっという関わりたくない
でも杏奈は優しい目で、

「大丈夫、1人にしない」

俺めちゃくちや感動した。

何でも『逃げる』だけで守ったり、避けたり、自分が思うように行

動してきた。

でも、杏奈は逃げることなく1つの1つを見捨てなかった。
これってすつげえーことだよな？

杏奈は俺の憧れになったんだ。

大事な、憧れの人に……………な。

「でも……死んだ」

京介は抑えるように手のひらを顔に押し付けていた。

生きていて、16年。

家が近所、親が同級生の仲良しということで16年間京介と同じ時
を過ごした。

でも、いつも笑顔ばかり向けるから……………。

泣いたところなんて見たことも無
かった。

TAKE 8：杏奈が消えた（4日目）

朝日と共に目が覚めた。

時計を見ると9時。

まあまあ遅くないねえ——・・・??

え——つと・・・。

昨日は杏奈が京介にばらさなかったから良かったものの・・・。

「——————」

あれー？あたしまだ寝ぼけてるう??

なんか幻聴が聞こえるーアハハ。

着替えの洋服に腕を通すと一息ついた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

あごに手を当てた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

ズボンに左足を通した。

「・・・・・・・・・・・・・・・・??」

次に右足。

着替えが終わるとまた一息ついた。

「ふわあ——・・・・・・・・」

その時あたしの脳にヒョウが走り去ったような速さである予感が脳をよぎった。

冷や汗が一瞬にして額から出た。

もう汗だくの状態で駆けずりながら自分の部屋を出て、隣の部屋、

京介の部屋のドアを軽々と開けた。まさに火事場の馬鹿力。

「っ……!!」

あたしの足は震えていた。

「京介が好きだよ」

音を立ててドアを開けたつもりが、“2人”はこちらを向かなかった。

杏奈と京介。2人がいた。

「杏奈……が？」

京介はキョトンとして口を開いている。

「うん」

頬に1滴の冷や汗を流している杏奈が答える。

「……そうなんだ」

京介はあごに手をあて考え込んでいた。

「でも……杏奈はもう……」

京介は窓の外空を見た。

もう西に太陽がが落上がる頃。

「バカ……あたしは……ここにいますよ」

杏奈は机の椅子に座っている京介の前に立ち、軽く両手を横に広げた。

杏奈のこの一言を聞いて、あたしはハッとした。

杏奈は自分を“杏奈”と言っているんだ——……。。

「はあ？姉ちゃん何言ってるの？姉ちゃんは友紀菜だろ？中川 友紀菜だろ？」

信じられないという様子で眉を寄せてハハッと笑う京介。
あたしはドアを開けたままその場にへたりこんでいた。

「あたしは・・・杏奈だよ・・・」

よほど杏奈は自分が杏奈だと分かってもらいたいのか、自分は杏奈とだけしか言わなくなった。

「だって杏奈は死——・・・」

京介が何か発する前に、杏奈は京介を優しく抱きしめた。

「・・・・・・・・」

「あたし、京介の“憧れ”のままじゃいられない——・・・」
杏奈はニツコリ微笑んだ。

そして京介の目をしっかりと、見つめた。

京介はおどけた顔をしながらある人物の名前を口にした。

「杏・・・・・・・・奈？なのか・・・？」

「！！！」

その瞬間、杏奈の体全体が光った。
体全体がまぶしく光る。

「あん・・・・・・・・！？お前、体つ・・・・・・・・！！」

杏奈は自分の手のひらを見る。

そしてニツコリ呟く。

「あ、いいんだ。京介にちゃんと、伝えられたから」

足元から光が段々と空に上昇する。

まさか・・・これで、最後？

あたしは立ち上がった。そんなにも広くない部屋なのに、2人が遠く感じた。

「あんたっ・・・！！バカ・・・最後にお別れしたのに何で来たのよ——」

杏奈はやっとこちらを向いた。

「最後なんて言っちゃヤダあ！！ちゃんとまた、次に生まれ変わった時は・・・杏奈に嫌われないようにできたらって——・・・！！！」

「ホント・・・バカ・・・」

杏奈の下半身が消えた。

『お別れじゃの・・・』

あたしの目の前に光と共に神様が現れた。

「お願い！お願いだから杏奈を消さないでえ——・・・！！！」
あたしの頬には涙が筋をつくっていた。

でも、筋からも溢れ出し、神様がぼやけて見える。

『無理じゃ。これを約束の上に契約をしてもらったんじゃから』
神様は厳しい顔つきでその場に立っているだけだった。

「ヤダッ・・・嫌だあ・・・止めてよぉー！！！」
ひざを床につけて両手の拳で床を容赦なく殴った。
痛い・・・でも、頭の中カラッポだ。

神様は黙ったままだった。

杏奈は消えていくばかり。

神様って何？

人々を幸せにするのが神様なんじゃないの？

平等って何？

人々を幸せにするのが平等なんじゃないの？

幸せって何？

人生って何？

道徳の授業で何時間も教えられた命の大切さ。

教えてよ——！！

あたしには何もできなかった。

“小春……”

「あんな……！！」

“あたしら永遠、に——……だよね……？”

「っ……！！」

杏奈は右手の小指を突き出して指きりを要求してきた。

あたしは震える手を杏奈の指に掛けた。

『指きりげんまん嘘ついたら針千本飲ます、指切った！！』

“お互い、忘れないように——”

顔が光に包まれる前に杏奈はあたしに、初めて“信頼”として笑顔
を向けた。

“ばいばい、京介……こは……”

杏奈が消えた——……。

「あつと、俺・・・ここで何してるんだっけ？ 母？」

杏奈の記憶が消えたのか、何も覚えていないみたいだ。でも不思議なことに、あたしの頭の中には杏奈との出会いからのことが記憶に残っていた。

思い出そうと思うと、なんだか優しさに包まれた。

あたしが顔を向けると京介はギョツとした目で驚く。

「何で泣いてんだよ・・・。。。。母？」

「ん？」

「どうしたっ・・・?? いじめられたのか!？」

あたしは激しく首を振る。

「ううん。へへ・・・ってか、兄ちゃんにいい情報！」

あたしは涙で赤くなった目を通り越して笑顔を作ってブイサインを向けた。

「へへー」兄ちゃんのこと好きな女の子いたよー」

「えっ？」

少し動揺したのか、肩が少し大きく揺れた。

「ど・・・どんな人？」

頬を少しピンクにして恥ずかしそうに聞いてくる。
そうだな――

「勇気があつて、強くて、かつこよくて、でもきれいで・・・そして・・・」

すぐ側にいたよ。今もきつと、京介の心にいるよ。

“ 相棒 ”

“ あたしら永遠、に……相棒、だよね……？ ”

“ お互い、忘れないように……な、相棒っ ”

杏奈が消えた。

TAKE 9：死（5日目）

杏奈が消えて1日、あの後何も考えなくなかった。

でも、あのピンクのフリフリの部屋をまた見たいと思って、旧・杏奈の部屋へ足を運んだ。

ドアに手を掛けると、思い出の重みなのか、重々しくて力が抜けた。2呼吸くらい深呼吸をし、バツとドアを開け放った。

目の前に広がる光景に思わず絶句した。

そこは華やかなピンクで女の子らしい部屋ではなく、暗く重々しいこもった物置部屋だった。

部屋を間違えた？

でも、確かにこの部屋。間違いない。

だって、杏奈の部屋だもの……。

「苺？何か探し物か？」

あたしはその場に体操座りをした。

消えたとしても、ここは杏奈の部屋。

動きたくなかった。

生きていた頃の“友情”よりも、死んでからのほうが“友情”が確かめ合えた。

そんなに寂しいことを忘れなくなかった。

あたしが何も答えなかったからだろうか、京介は困った感情をため息に混ぜて出すと腕を組んだ。

「どうした？苺？」

「兄ちゃん……」

京介……。

ブルルルルルルルルッ
家中に電話の着信コールが鳴り響いた。

「あ、そうだ。母さんたち誰もいないんだっ・・・」

京介はしぶしぶ頭をかきながら階段を下りていった。

あたしも追いかけるかのように杏奈の部屋の前を離れた。
何で追いかけたかって？

何か、予感がしたから。2日前には神様の夢を見たから・・・。

あたしはようやく下に降りた。

その時あたしの心臓がビクツとした。

京介は青ざめた顔をして電話で『ハイ』としか答えない。

最後まで『ハイ』としか答えず電話を切った。

その手は震えていた。

どうしたの？京介。

あたしの心の問いかけを聞いたかのように、京介はゆっくりと首だけをこちらに向けて口を開いた。

「小春が・・・死んだ？」

疑問形で意味が通じなかった。
でも、単語だけで読み取った。

あたしが・・・死んだ？

バタンツ。

足に力が入らなかった。

京介は『信じられない』と冗談で受け止めるような笑顔で立っていた。

「小春が死んじやったんだって」

あっさりとしめて言う京介。

あたしと同じだ。足に力、入らないんでしょ？

京介は足を絡ませながらも玄関のドアに手を掛けて外に出た。

あたしも急いで深呼吸をして気を落ち着かせて足に力を入れた。

京介の横にびったりくっついて病院へ向かった。

“あたし”を久しぶりに見た。

“お母さん”も、“お父さん”も、久しぶり！

感動で再会したはずなのに・・・こんな形で・・・。

泣いてる・・・。そうだね。“家族”だもん。

電話で駆けつけたのか、京介の“お母さん”、“お父さん”も泣いていた。

死に化粧をして肌の色が不気味に青白い。

自分の死に顔が見えなくなっていた。

ただ1人この病室で、“あたし”をのぞいて泣いていなかった人物。京介だった。

ただ目を開いたまま硬直して、まばたきもしなかった。

それどころか顔は家を出る時よりも青ざめ、血の気がしなかった。

小刻みに体は震え、何か小声で呟いている。

見たことがない“京介”だった。

その状態で病室から出て、廊下の長いすに座りふつうの壁よりも出っ張った壁に身を任せて壁にジャムを付けたような状態だった。

あたしは京介の視線の先に立った。

目を見るとうつろで赤くなっていた。

そして、呟いていた言葉が聞こえた。

「俺・・・まだ小春に守られたままで・・・。次は俺が守ろうと思つたのに・・・。でも・・・“守る”って何だろ・・・小春のこと、好きだからかなあ・・・」

え・・・？

今何ていったの？

京介・・・もう1回・・・。

でも、守られたって何？

「守られた・・・？」

あたしが言葉をこぼした時、京介はうつろな目をパツチリ開き、姿勢をきちんと戻すと猫背になりひざにひじを突き立てて手のひらを組んだ。

「莓・・・お前小春のこと知ってたよな・・・？」

「うん・・・」

え、何？

「じゃあ教えてやるよ・・・。何で小春が死んだか」

TAKE 10：真相

「教えてやるよ。何で小春が死んだか」

京介の目はキリッとしていて真面目を通り越す表情だった。ずっと知リたかつた事件の真実。

あたしに教えてくれるの？

ゴメン、突き飛ばされたことしか覚えていない。でも、1つだけ覚えてる・・・。

『ガキッ！！バツカじゃないの！？』

あの日あたし、怒つてた――・・・？？

「すつ・・・好きです！」

何事もなかった1日、俺はいつものように学校の門で小春を待っていた。

小春は生まれた時からの幼馴染。

家も割りと近くて何より親が同級生の親友。

だから、親の血がつながっているのか、小春とはすぐに仲良くなれた。

『京くん大きくなつたらなにになんのー？』

『ぼく“けーさつかん”になりたいなあー？？』

『“けーさつ”??』

『うん！いっぱい強くなってみんな守る！』
ぼくは胸の前で拳をグツと作った。

『すごい！！かっこいいよお！じゃー小春のことも守ってくれ
んやね！』

小春はパツとした笑顔で聞いた。

『もちろん！』
ぼくは誓った。

でも俺の前に現れたのは小春じゃなかった。
黄色のネクタイ……。同じ学年だった。
でも顔も名前も知らない。
そんな“やつ”が、俺に告白してきた。

「あの……。誰かな？」
俺が聞くとその子はハツとしてカバンから1つの手紙を取り出して
俺に差し出した。

「さつ……。さっき言ったとおりです！！これ読んでくださいっ……
・！」

俺が端をちよいとつまむとパツと手を離し、走り去っていった。

『酒井 雛』

名前……？

「ふゝん……。モツテモテじゃない旦那」

その声に俺の肩はビクツとした。

「こ・・・小春」

おそるおそる後ろを振り返ると仁王立ちの小春の姿。

「酒井さんかあわいゝよねえー。返事はどおすんのかなあゝ?？」
ニヤニヤしている笑顔が俺の背筋をゾクツとさせた。

「はっ?!何言つてんだよ?」

「返事は!?!どうするの!?!」

真面目に怖い小春の顔。

「しねえよ!そんなもん・・・」

「ハア!?!あんたそれほつとくつもりなの?そしたら酒井さんかわいそーじゃない!?!」

だんだんいらつきが膨張してくる。

「めんどくせえ」

俺は思わず捨てるように言葉を吐いてしまった。
すると小春の表情がますますシワを寄せた。

「ガキツ!!バツカじゃないの!?!男のけじめくらいいい加減つけなさいよ!断るんだったらハツキリ断ればいいじゃない・・・・・・・・」

「お前ほど物をハツキリ言えたらな・・・」

途端に小春はツカツカ早歩きで歩き始めた

「おいっちょ・・・小春待てよ」

「だって・・・京介が悪いんじゃないっ!! だいたいっ・・・京介の好きな人って・・・」
顔を火照らせてこちらを向き、顔を隠す。

「えっ・・・」

「だって、幼馴染・・・でしょ？好きな人ぐらい教えなさいよっ・・・」

そしてまた俺に背中を向けた。
しばらく俺は考えて口を開いた。

「俺の・・・好きな人は・・・」

「え？」

首だけこちらに回転させて前を見ていなかった小春に、トラックが猛スピードで走ってきた。

「バカッ・・・!! 小春!!」

俺は陸上部の脚で走った。

これでも県大会に出場したエースだった。

トラックのスピードに勝って小春を安全な歩道に押し出そうとした。
だが、バランスが崩れてトラックと小春の間に入った。

目の前のトラックが巨大化する。

もうダメだ・・・。

でも、あの日の約束、俺守れるのかな・・・??

『すごい!! かつこいいよお!! じゃー小春のことも守ってくれるんやね!!』

守るよ。小春。

俺は目をつむってジッと構えた。

突然グイッと後ろに押し倒されて目の前に影ができた。

「京介っ・・・バカ・・・」

目の前には小春が背中を向けて両手を横に大きく広げていた。

もうトラックはすぐそこにいる。

でも小春までの距離は意外にも遠かった。

頭の中がぼーっとし、今何が起きているのかも理解ができない。

「っ・・・！！！！小春

——！！」

目の前で大きく弧を描く小春の体。

血しぶきと共に地面に倒れた。

「いや——！！」

そこを通りかかった女性の声で俺の意識は戻った。

小春が救急車に運ばれている・・・。

血だらけで、動かない。

俺は何をしていた？

ただここにいただけ。

約束・・・守るって・・・守れなかった。

俺が・・・小春に、守られた。

「これが小春の死んだ真相さ．．．誰も知らない。俺だけ。警察は単なる事故としか思っ てないけど、真実を語る余裕なんて、俺にはなかった。でも．．．先に逝っちまったな．．．。ケンカしたままで．．．。俺の好きな人、聞いてもらえなかったな．．．」
涙を流して笑っていた。
何で．．．??

「小春の死は俺のせい．．．俺のせいだ．．．。守るって、ガキの頃の約束だけど。俺はちゃんと本気だったんだ。約束、守るところが小春に守られて．．．」
笑っていた表情がだんだんと落ちていった。
そして顔を手で隠した。

「兄ちゃん、好きな人って．．．?」
そうだあの時、なんて言おうとしたの?

「小春．．．．．」

一瞬時が止まった。

「俺はただ逃げる為だけに何かを守ろうとしてた……。でも、本気で、いつでも守るっていうなら、“好きな人”しかいねえだろ・・小春うつ・・。」

顔を抑えている手に力が入った。

あたしは喜ぶどころか、悲しい・・。

こんな形で聞くことになるなんて。

京介、ここにいるよ。

あたしだよ？小春だよ？

京介が好きで“妹”になっちゃった。

「つ・・・・。」

また京介の側で生きること、何かが得られるものだと思っていた。
でもそれは、悲しみを歌うことと、同じだった——・・・。

TAKE 11：京介

その夜、京介の様子は一変した。
体の動きからして鈍くなり、家の壁に背を向けたまま倒れこんでいた。

京介のお母さんは目に涙を浮かべて京介の様子を見守っていた。
京介の目には“光”が無かった――。
真っ黒に塗られて瞬きさえ数分に何回程度になっていた。
京介の側に寄ると、つぶやく声が聞こえる。

「好きな女、守れなかった」

何度も何度もつぶやく。

その言葉を聞くだけで、あたしの胸は痛んだ。

“安心してよ京介。あたしはここにいるよ？”

今すぐ言いたい。

“あの時はついカッとなっちゃってえー”

仲直りしたい。

“あたしも、好きでした。フフッ”

伝えたいのにつ……。

今すぐ飛びついて京介を安心させてあげたい。

でもあたしには何もできない・・・。

ここに、立っていることだけしかできないんだ――

・・・。
妹だからだめなの？違う。死んでるからダメなの？
違う。

『そーゆーの、弱虫ってゆーの!!』

あたしが“弱虫”だから、ダメなんだっ・・・。
正体がばれてしまったら“小春”としての存在をすべて消されてしまふ。

この言葉にずっと怯えてた。

あたしが“小春”であつたことよりも、言いたい一言を言えばいいのかな――。

分かんないよ――・・・。

お風呂に入って気持ちを落ち着かせた。
体から出る湯気が気持ちいい。

「莓ちゃん・・・お兄ちゃん、呼んで来てくれる？」

京介のお母さんは手を震えさせながらあたしに頼んだ。
階段を足をピタピタさせながら上った。

2階は薄暗く、京介の部屋を見つけるのに時間がかかった。
もう1度1階に下りて懐中電灯をもらい2階へ上がった。
さすがに3歳児のような体は往復はきつい。

息もすっかり荒くなって京介の部屋のドアに手を掛けた。

カチツ・・・カチカチ・・・

不気味に響く奇妙な音が部屋から聞こえる。
急に冷や汗が出てきて頬を伝う。

ドアノブを握っている手が小刻みに震えた。
このドアを一瞬開けようか迷った。

ドアを開けたらどんな光景を見ることになるか、一瞬頭に浮かんだ
からだった。

ハッとしてあたしは頭を大きく左右に振った。

気持ちを切り直すと一気にドアを開けた。

そして、懐中電灯を落としてしまった。

「俺……が、死んだほうが良かったんだ……。俺のせいで……
小春は……」

机の蛍光灯の光で京介の肩辺りから見えていた。

左手の袖をまくって手首に当てていたのは、カッターナイフだった。
足がすくんだ。

うん、これは予想していた光景だったから。
でも予想できなかった。

あたしのせいで……あたしのせいで……

頭の中に何度もこだまする。ズキズキなるほど。

バシッ！！

自分で自分の頬を平手打ちしたことようやく目が覚めた。
まず最初に頭に浮かんだ言葉。

『止めなきゃ』

今にも切り刻みそうな京介の手を止めるべく、あたしは無我夢中で

飛び込んだ。

「アホ——！！！！」

ボンッ。

あたしは京介の頬を思いつきり殴った。

「っ……っ？！」

椅子から転げ落ちてすぐに頬に手を当てて何が起きたのか確認する。カッターがこちらに飛んできたのですぐに拾ってゴミ箱に入れる。そして呆然としている京介に向き合ってにらんで、京介の体にまたいで乗って、胸倉の襟を掴んで叫んだ。

「しっかりしろ！！小春は何で兄ちゃんをかばったんだ？！生きてほしかったからでしょ！？

兄ちゃんまで生きる希望なくしたら、誰が小春の分まで生きてやるんだよ！！」

微かに揺れる京介の頭。

表情が薄暗いけれど見えた。

さっきの表情とは変わらなかったが、微かに瞳から液がこぼれてきた。

「小春はっ……本当に、死んだんだな……」

狂ったような笑い顔を見せた。

あたしは胸倉を掴んでいた手を緩めた。

「守れなかったのに、小春の分まで生きて……いいのかな……

「??」

その表情は次第に悲しみへと変わった。

「ばかやろうつ・・・ホントガキツ・・・。いいに決まってるじゃない。」

兄ちゃんの人生なんだから・・・」

「小春・・・・・・・・・・」

京介は目を丸くした。

あたしは小さな掌を京介の頬に当てた。
とても温かく、温もりがあつた。

「苺っ・・・・・・・・・・。俺・・・」

さっきのことをようやく理解したのか、ズキズキする頬を押さえて
いる手を下ろし、あたしを大きな体で抱きしめた。

「効いた・・・お前のクソパンチっ・・・サンキュウ」

目に涙を浮かべて笑っていた京介の目には、光が戻っていた。

きつと、あたしが“妹”としていなかったら、京介はこの世にいなかったかもしれない。

京介は強いけど、あたしが守る。

存在をかけて。

TAKE 12：行き先（6日目）

今日はいつもより早く目が覚めた。

・・・が意識だけ。体が起きない・・・。

「よしっ！“せーの”で起きよう！」

グツと拳を作った。

「せーのっ！！」

・・・。。

体が起きない・・・。

もう少し寝ちやえ♪

布団をかぶり直して目を閉じた瞬間、

「莓ー！！起きろおー！！」

勢いよくドアを開けて入ってきた京介。

元気だ・・・。昨日の自殺寸前とは大違い。

そりゃそうだよな。京介は強いんだから。

「莓！今日は買い物付き合えよな！！」

おいおい、16歳の大の青年が5歳児さそって買い物なんて行くかあ？？

それが表情に出たみたいだ。

「何だあゝ？？行きたくないと？」

杏奈並にすごいねこの人。

だって今日は地上に来て6日目。

もう時間がないのに……。京介と過ごす場所が店だなんて……。

「ほら！着替えて！」

京介は張り切ってドアを閉めて出て行った。

「……………」

しぶしぶあたしも着替え始めた。

今日はフリルのワンピース」

何か杏奈思い出すなあ……。

あ、何で杏奈の存在が消えたのにあたしは覚えているかって??

だって、バレたらこの地上人の記憶から消えるだけって神様みたいなじいさん言ってたしね

え……。

着替えが終わると1階へと降りた。

「あれ？兄ちゃん？」

1階には余裕姿で朝食を食べる京介。買い物は??

「あ、ゴメン。やっぱ午後からでいいやあ」

ったく、人を早くに起こしといてなんてこと言うか!!

あ、もう昼にもなるしねえ。っていつまで寝てるんだろあたしも。

あ、そっぴや京介から買ってもらったネックレスどこだっけえ??
と、いう感じで正午が過ぎた。

キラキラ光る苺のネックレスを首元にかけて安心する。

“苺”になつて丸5日、いろいろなことがあった。

杏奈は消えちゃうし、京介も死のうとした。

あたしの体も死んだ。

せっかくこの7日間生きていたら、“小春”として京介に会えたの

に。

「これも全部“神様”のせいだあ——！！！」

“へつくしょん！！・・・誰かわしの噂をしておるな”

「小春——？？どうした？神様が何だって？？」

京介が苦笑で問いかけてきた。

「えーつと・・・願回事」

ハハッ……。会ったことあるなんて言えねえ……。。

「願回事かあー」

京介の視線が遠くなった。

どこを見ているのか分からない。

そうだね京介……。

神様って不平等だね。

人なんて幸せにできないよね。

だって今、幸せじゃないんだもん。

ね、神様————？？

パツとして京介が椅子から立ち上がり、時計を見た。
もう午後2時過ぎになっていた。

「小春、行くか??」

京介の変わらぬ笑顔にあたしは答えた。

「行こう！」

京介の手を引いて、玄関の扉を開けた。

TAKE 13：未練

京介の横を歩いていると気づく。

目の前に広がる景色が輝いて見えた。

道路、市役所、郵便局、警察署、公園、山、進学塾、人の笑い声、車の音、すずめのさえずり、信号の音、自然のにおい。

汚くつても、汚れていても、この世のものはみんな、あたしにとっては宝物になるんだね。

2度とここに来ないわけじゃない。来ないかもしれない。

でもこの景色を忘れたくない。

家族、友人、先生、親戚……好きな人。

自分がやっと手に入れたものを、失くしてしまうんだ……。

ねえ……あたしの声届いてよ。

神様——…。

京介に連れられて店に入り、あたしはゲームセンターに連れてこられ、京介だけ1人でどこかへ行ってしまった。

ハアハア言いながら戻ってきた京介は手ぶらだった。

何しにいったんだろうと思いつながら店を出た。

ニコニコしながら隣で歩いている京介を見てムツとした。

あたしもうすぐ消えちゃうんだよ？分かってる？

クツと、京介の洋服の裾をひっぱった。

それに気づき、京介はあたしの手を大きな掌でにぎってくれた。

あたしは京介のそばに少しでもいたかったから、莓としてここに来たんだ。

それだけ？

あたしの未練はそんなに単純じゃなかったよ。

伝えなかったことがある。

でも簡単には言えないような。

あたしの全存在をかけて。

「俺、そろそろ学校行かなきゃな・・・」
え？

「小春が事故あつてから俺9日間も行つてねえや。どうしよう、莓前を向いたままあたしに問いかけてきた。」

「え・・・兄ちゃん・・・。学校行つてないの・・・？」
そついや朝から京介を見ない日なんてなかった・・・。

「あいつがいない教室に戻るのが怖くてさ・・・。あいつがいねえところなんて、俺の居場所がねえんだ・・・」
気がつくあたしは京介の手から自分の手を抜いていた。

「京介は・・・もつと強い人だと思っていたのに！！弱虫！！」
あたしはわけも分からず京介に言葉を浴びせると家に向かって駆け出した。

「ちよつ・・・京介つて・・・莓！！待てよ！！」
陸上部の足で追いつき、あたしの腕をつかんで止めた。

「離してよお！！バカあ・・・」

必死で抵抗して振り払おうとしたけど京介の手は離れなかった。

「あのっ・・・だからぁ・・・莓ぁ・・・」

「離してって!!」

手ごたえのある音であたしの意識ははつきりした。

あたしが京介を車道側に押してしまった。

交差点のすぐ脇からあたしの倍の倍以上あるトラックが走ってきた。あたしには背筋を冷たい物が走った。

すぐにあたしの足は動いた。

この光景。前は逆だったけど、結果は同じにしないではいけない。

肩を押さえて倒れこんでいる京介の前に出た。

トラックと京介に挟まれた。

京介はハッとした声を出した。

「おい! 莓? 何やってんだよ? 死ぬぞ!!」

焦っているのは分かっている。

でも後には引けない。

両手を広げて目の前の巨大化するトラックに構えた。

「莓!」

京介に肩をつかまれて余計に力が入った肩を震わせて京介に嘆いた。

「あたしはもう死んでるよ?」

ププー!!

今更気づいたのか、トラックの運転手があわてている。

「は……？死んで……？」

理解不能な京介の目がよがむ。

「京介っ……バカ……」

涙した顔で京介の顔を見た。ハツとした表情を見せ、一瞬震えた口を開いた。

「小春

っ……！」

懐かしく響く名前の叫び声に、あたしは意識をなくした。

TAKE 14：小春

真っ暗だった視界に光が差し込んだ。

ゆっくりと目を開くと京介が泣いていた。

視界が妙に光っていると思っていたら、体全体が光っていた。

ゆっくりと体を起こし、うつろな目で京介を見た。

「あたしい・・・消えるんだあ・・・」

不器用に作り笑いを見せながら首を傾けた。

「・・・小春なのか？」

今もまだ信じられないと言う表情の京介。

「んっ・・・」

あたしが答えると京介はそれ以上聞かなかった。

辺りを見ると、そこはあたしが最初に苺として訪れた公園だった。

「はは・・・懐かしいなあ・・・」

そう言いながらまた京介のほうを振り返る。

「ゴメンネ。京介・・・ムキになんかなっちゃって」

泣いていた目を服の袖でぬぐって京介は首を振った。

「俺のほうこそ・・・ハッキリ言えずにさ・・・ホントガキだよな・・・」

掌で自分の顔を抑えて悔やむ京介。

「やだなあ。京介。許すに決まってるじゃない。幼馴染でしょ？」
姿は蓐。中身は小春。そんな状況に戸惑いながらも本音を言う京介だった。

小春の腰の部分まで消えてきた。

「1つだけ・・・聞きたいことあったんだあ」

「何だ・・・？何だよ・・・？」

小春の消える状況に焦りながら聞く京介。

「京介さあ・・・あの時何て言おうとしたのかなあ・・・??」
あたしは京介のひざに頭を乗せて目を閉じた。

京介の涙らしき水滴が頬に落ちてきたのを感じた。

ハツと息を飲んだり、鼻の頭を触りながらもようやく答えてくれた。

「お前がよく分かっているだろう？」

「やだなあゝ疑問系。アハハハ・・・」

自分でも笑いが棒読みだと感じた。

うれしいけど、もう本当に無理なんだ・・・。

さっきまではそばにいらただけ、これからは永遠に無理。

「あたしもだよ——・・・」

目に水滴がたまった。

それはしょっぱくて、もう2度と味わうことのできない味だった。

「普通にいて、普通に話して、普通に笑い合えて、普通に騒いで、普通に遊んで、普通に告白して、普通に付き合って、普通に手繋いで、

普通にとなりにいて、普通にそばにいて・・・普通に生きていけたら・・・

良かったのになあ――」

その言葉に自分で寂しさを感じた。

こんなに生きることについて考えるなんて、空前絶後だった。目の前から光景が消えたと思ったら、また目の前に暗闇が戻った。

京介がいない。

京介はどこ??

探して探すうちにやっと理解できた。
あたしが消えたんだ――・・・。

「小春っ!!小春・・・」

自分の元からいなくなった小春。

京介もやっと理解できた。

小春が消えたことを。

「うわあああああああああ!!!!」

その声は、公園の敷地以上にこだました。

小春が消えた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5028e/>

君のいた日々

2010年10月28日07時01分発行